

News Letter

■2015年6月8日発行 ■編集・発行／三重大大学高等教育創造開発センター

授業科目でPBLを導入する教員へ教材開発費・授業開発費を支援する「PBL教育支援プログラム」に、2014年度は10件が採択されました。本号では、シリーズ第7回として、鈴木英一郎先生(学生総合支援センター)の「学生生活支援実践」におけるPBL教育の実践報告を掲載します。

2014年度開講 「PBL教育支援プログラム: 振り返りの工夫」成果報告 (7) 「 学生生活支援実践 」

はじめに

平成26年度後期に行ったPBL形式を取り入れた本授業について報告する。

本授業は、共通教育においてキャリア教育科目の1つとして位置づけられており、中でも「キャリア実践科目」として、キャリア教育の要素を加味させながら、授業内で受講生に何らかの実践を課すことが求められるものであった。本年度の開講に当たっては、平成24年度に続き、当プログラムの支援を受けて行ったため、以下にプログラムのテーマであった「ふり返りの工夫」に焦点を当てながらその授業成果を報告する。

授業の概要

「振り返りの工夫」について言及する前に、改めて本授業の内容に関する概要を述べておきたい。本授業は、「学生支援」をテーマとして、その背景にある考え方を理解した上で、様々な特徴のある学生がいかに充実した大学生活を送るか、そのために同じ学生として自分たちに貢献できることは何か、についてグループで検討し、それに基づく実践を行なうことを課題としている。毎回の授業は、グループディスカッションを中心に構成され、教員やSAがその間、各グループを巡回し、適宜必要な助言等を与えるようにした。実際の授業の手順、および今年度の授業で実際に取り組まれた企画は、それぞれ表1、表2のとおりであった。

表1 平成26年度「学生生活支援実践」の授業内容

1	オリエンテーション／自身の持つ「リソース」発見ワーク
2	【講義】学生支援に関するニーズの把握のために (次回授業までに、各自で「ニーズ」の発見と「そのためにできる事」について 検討してくることを宿題とする。
3	仮グループ内において、各自が発見した「ニーズ」と「そのためにできる事」の報告会
④	先回の仮グループ内での報告会を受けて、仮グループ毎に全体へプレゼンする (その後、投票により授業で扱う企画を決定し、実践グループ(本グループ)を再編成する)
5	グループによる企画会議①
6	グループによる企画会議②
7	グループによる企画会議③
⑧	中間報告会
9	グループによる企画会議④及び実践
10	グループによる企画会議⑤及び実践
11	グループによる企画会議⑥及び実践
12	グループによる企画会議⑦及び実践
13	実践報告会に向けてグループによる活動の振り返り
14	実践報告会①
15	実践報告会②

※第4回、第8回授業においては、各受講生に対して「自己評価シート」を記入させた。

表2 本年度において各グループが取り組んだ実践活動とその概要

グループ	取り組んだ実践活動	概要
Aグループ	「クロバス」の作成	「シラバス」に記載されている内容だけでは分からない部分(授業の難易度、教員の人柄、テストやレポート情報など)について、実際に当該授業を受講した学生に対してインタビューを行い、それを基にした冊子(クロバス)を作成した。
Bグループ	「三重大生による三重大生のためのファッション誌」の作成	学内のおしゃれな人々にモデルをお願いして、「どんな服を着たらいいかわからない」、「学生らしいファッションを知りたい」という学生のために参考になるような、学生目線のリアルなファッション誌を作成した。
Cグループ	「楽々MAP」の作成	江戸橋駅から学内の主要箇所までどのルートを通っていけば早くたどり着けるのか、また注意が必要な危険な箇所はどこかについて、実際に調査して、その結果をもとに地図を作成。環境情報科学館にも掲示した。
Dグループ	「失敗しないアルバイト情報誌」の作成	三重大生に対するアンケート調査をもとに、様々なアルバイトに関する実態を把握し、これからアルバイトを探そうとしている学生に対してリアルな情報を伝えることができる「アルバイト情報誌」を作成した。
Eグループ	料理七変化プロジェクト	食べきれずに余ってしまうことがある料理について、少し手を加えるだけで別の料理に変えられるアイデアを提供して、実際に体験してもらうという料理教室形式のイベントを企画。自炊できる学生の増加とともに、バランスのとれた食生活習慣の促進を図った。

本授業で行った振り返りの工夫

本授業では、毎回その回にグループで行った活動、自身がその中で果たした役割、今後の活動に向けての個人及びグループの課題等を振り返るための「振り返りシート」を受講生各自に記入させた。振り返りのポイントはその都度の「グループ活動の流れ」と「グループの中で自身に与えられている役割(メンバーからのニーズ)」がそれぞれ正確に把握できていることである。この「振り返りシート」は、提出の必要はないが、期末に課すレポート作成のための基礎資料として各自で保管させた。

また、第4回、第8回授業(それぞれグループ毎にその時点までの成果発表をする回に当たる)において、受講生各自に「自己評価シート」を提出させた。このシートでは、その時点までの自身の授業へのコミットメントやグループ活動への貢献度について10点満点で自己評価するとともに、その根拠および今後その点数を上げるために必要なことについて記入するよう求めた。このように、授業の最後だけでなく、授業期間中においても何度か自身の取り組みに対して振り返りの機会を作ることで、その後の授業にもより積極的に取り組む必要があることを意識させた。実際、第4回授業時の受講生の自己評価点の平均は6.80点であったのに対して、第8回授業時の受講生の自己評価点の平均は7.88点となっており、一定の効果があったものと考ええる。

それ以外にも、先述の各成果発表の回では、他グループの発表に対して各自コメントを記入させ、発表後にそのコメントを回収し各グループへフィードバックした。さらには、これを基にして、それまでのグループ活動の振り返り、およびそれ以後の改善へとつながっていくよう全体に指示した(最後の発表会では、グループとしての全体考察につなげるよう指示した)。

期末には、その集大成として各自にレポート課題を課し、活動内容の詳細、授業を通して自身が身につけた(磨いた)と感じている能力やセンスの自己報告とともに、「振り返りシート」と「自己評価シート」を参考にして、最終的な自己評価と、貢献度の高かった他メンバーへの評価を行った。

本授業がねらいとしているところは「解が明確でない課題にグループで取り組む際に自身が貢献できるポイントについて気がつけるセンス」、あるいは「自分のパフォーマンスを自分の言葉で振り返り、自分なりに価値のある体験として意味づけられる能力」の涵養である。また、これらは冒頭で述べたように、キャリア教育(就業力の育成)という面からも十分資する内容であると考ええる。これらを受講生に意識させる機会として、個人単位とグループ単位の両面で、かつ授業期間中も含む何度か、上記のような振り返りを行ったことは一定の効果を果たしたものと考ええる。

(鈴木 英一郎)